

三内丸山（2）遺跡に見る縄文集落の姿

岡田 康博

一 はじめに

青森市三内丸山（2）遺跡や六ヶ所村富ノ沢（2）遺跡をはじめとする最近の縄文時代の大集落跡の発掘調査は、少なくとも「縄文時代は定住生活である。」ことを明確に示している。住居・貯蔵・埋葬等の各施設が同一集落内でセットで検出される、いわゆる定型的集落の出現である。円筒土器文化圏においても定型的集落の存在が指摘されていたが、明確となったのは最近のことである。とりわけ三内丸山（2）遺跡では、縄文時代前期・中期の集落跡が良好な状態で検出されるとともに、泥炭層中に形成された遺物廃棄ブロックから通常では残存しない木製品・漆器・骨角器や植物性遺物、食料の残滓と考えられる堅果類・種子や動物遺体大量に出土しており、当時の生活をかなり具体的に調査分析が可能と考えられている。ここでは、これまでの調査成果を踏まえながら三内丸山（2）遺跡の重要性や今後の課題等について簡単に述べるものである。なお、発掘調査は平成六年度も継続して行なわれる予定であり、執筆時点では平成四・五年度の調査成果に拠るものであることをお断わ

りしておく。

二 三内丸山（2）遺跡について

青森市三内丸山（2）遺跡は青森駅の南東約三キロに位置し、標高約二〇メートルの河岸段丘上に立地する。北側を沖館川が流れ、南側は沖積平野に挟まれた東西に伸びる舌状の丘陵に集落は形成されている。

本遺跡はすでに江戸時代から知られ、『永禄日記』や菅江真澄の『すみかの山』にも遺物発見の記述が見られる。また、土偶の多数出土する遺跡として有名で、各地の博物館や資料館に収蔵されている資料も多い。過去に幾度か発掘調査が行なわれ、最近では昭和五十一年に県総合運動公園の建設に伴い県教育委員会により発掘調査が行なわれた。縄文時代中期後半の円筒上層d・e式期の、二列に配置された土坑墓が五六基検出されており、縄文時代の葬制を知る上での貴重な資料となっている。周辺には縄文時代中期の三内沢部遺跡、近野遺跡、後期的小牧野遺跡等の著名な遺跡が点在する。

今回の発掘調査は県営運動公園拡張事業に先立ち、平成四年度から県

埋蔵文化財調査センターが継続して行っている。現在は新県営野球場建設予定地を調査している。

継続調査中であるが、主に縄文時代前期（五五〇〇年前）・中期（四五〇〇年前）の大集落跡、平安時代（一〇〇〇年前）の集落跡、中世（四〇〇年前）に亘る複合遺跡であることが判明した。中でも縄文時代前期の集落跡や泥炭層中に形成された遺物廃棄ブロック、中期の集落跡は集落全体の様子が具体的に把握できる貴重な資料である。

以下に時代毎にその概要を述べる。

〔縄文時代前期〕

大型住居跡を含む集落跡、土坑墓を中心とする墓域、広範囲に形成された遺物廃棄ブロック等が検出されている。特に注目されるものとして、遺跡の中央の谷及び沖館川に面した北側に形成された遺物廃棄ブロックがある。遺物廃棄ブロックは泥炭層の中に形成され、大量の土器・石器他に土偶・土製品・块状耳飾り・木製品（弓、篋、鏝、漆器、袋状樹皮製品、編物状樹皮製品、組紐等）・骨角器（針、釣り針、銛先、装身具、ハンマー）・哺乳類骨（シカ、イノシシ、オオカミ、タヌキ、ノウサギ、ムササビ、リス、クジラ、イルカ）・魚類骨（マグロ、ブリ、ボラ、メカジキ、マダイ、ヒラメ、ニシン、イワシ、サメ）・堅果類（クリ、クルミ）・種子（ニワトコ、ヤマグワ、サルナシ、キイチゴ、ヤマブドウ）等が出土している。これらの遺物の時期は円筒下層a式期である。

また、円筒下層式土器が層位的に出土しており、特に円筒下層a式からb式への型式変遷を明瞭にとらえることのできる数少ない貴重な出土

状態である。前期の集落跡については平成六年度に重点的に調査予定である。

〔縄文時代中期〕

中期の集落は、中央の谷を挟んで大きく東西に二分され、西側に住居跡や掘立柱建物跡群等の居住域、東側に土坑墓を中心とする墓域となっている。しかし小児用の埋葬施設と考えられる埋設土器群は谷を取り囲むように平坦部の端に構築され、一部は居住域にも分布している。掘立柱建物跡は住居跡群の外側に整然あるいは台地の縁に密集して配置される。遺物廃棄ブロックは谷に向かって住居跡群の内側に形成されている。この遺物廃棄ブロックは土器・石器と一緒に、堅穴住居跡等構築の際のものと考えられる排土も大量に廃棄され、廃棄行為を繰り返すことによって平坦部を作出する、造成工事と呼べるような状況を呈している。大型住居跡は長軸一五メートル前後のものが多く、長軸三〇メートルを越えるものが数棟検出されている。土坑墓は平面形が小判形で、規模が長軸一〜二メートル、短軸〇・三〜〇・八メートル、深さ〇・二〜〇・六メートルである。長軸方向は北ないしは北東のものが多く、また東西に並列して配置されており、整然と並んだ集団墓地は当時の墓制を考える上で注目される。副葬品として、石鏃・北海道式石冠・異形石器・翡翠製垂飾品等がある。人骨は検出されていない。埋設土器群の一部には底部や側面に穿孔しているものがあり、中に握り拳大の円礫が一〜二個入っているものが多い。掘立柱建物跡は一間×二間の長方形六本柱で構成されるものが大部分である。その他に一間×一間の方形四本柱、一間×三間八本柱のものがある。柱穴間の距離は約三・八メートルである。一

部の柱穴からは木柱がそのまま残存して出土し、最大で径約七〇センチのクリ材がある。粘土採掘坑は集落の端、舌状の段丘の中央平坦部にあり、上位火山灰層除去後に下部火山灰層を採掘している。

これらの遺構の他に、膨大な土器・石器を中心としてダンボール箱数万箱分出土している。

三 これまでの成果と今後の課題

発掘調査は現在なお継続中であるため、詳細については別の機会に改めて報告したいと思うが、集落研究の視点からこれまで成果を簡単に次に要約する。

①広範囲にわたる発掘調査により、当時の「ムラ」の様子が具体的に明らかにすることができたこと。例えば各遺構（住居跡、掘立柱建物跡、土抗墓、埋設土器遺構、遺物廃棄ブロック）の配置の状態から空間利用が再現できる。一般に空間利用は社会的規制を強く反映するとされているため、この点は縄文社会を理解する上で基本的な作業である。

②土器編年の詳細な分析により、限りなく同時性の高い集落構成が判明する可能性があること。普通、集落は複数時期に亘って形成されているため、ある限定された一時期にはたしてどのような規模の集落であったかは不明な場合が多い。たとえ、限定された時間幅であっても一土器型式の時間幅を決して越えるものではない。

③出土遺物の分析から「ものの流れ」から見た周辺集落との相互関係が想定可能である。例えば明らかに他地域から交易によって持ち込まれた遺物（ヒスイや琥珀）の集積する集落、いわゆる拠点集落（三内丸山（2）遺跡が相当する）と一般集落間との分配や流通の問題の提示。

④泥炭層に残存している花粉・種子・木材から当時の気候や集落を取り巻く自然環境や生業の復元モデルを具体的に提示することができると。この場合、栽培植物が検出されれば縄文時代Ⅱ狩猟採集社会と単純に規定することは困難となる。

⑤同様に、大量に土中に残存する動物遺体（哺乳類）や魚骨の分析を通して当時の食生活、漁・猟法の想定が可能となる。

⑥これまで祭祀関連施設と考えられていた掘立柱建物跡の再検討が必要となった。本遺跡検出の掘立柱建物跡は特に大規模であり、祭祀関連施設の他に倉庫・楼閣の可能性がある大型の高床建物であると考えられる。（例えば佐賀県吉野ヶ里遺跡検出の楼閣より規模、柱の太さとも大型である）。

縄文集落は住居、貯蔵、調理、埋葬等の各種施設の複合体である。さらに周辺の生活空間全てを含んだ「ムラ」が存在していた。しかしそれらは時間の経過と共に消滅し、その痕跡を今日土中に残すものはほんの一部にしか過ぎない。さらに発掘調査で発見されるものはより希少である。まして全面調査されることのない緊急調査で、三内丸山（2）遺跡のように数千年の間継続して営まれた大集落の全容が判明する例はほと

などない。その意味で本遺跡の調査は極めて重要な使命を担っている。
三内丸山（2）遺跡の集落の解明こそが縄文社会の実態究明の第一歩である。

執筆にあたり、ともに平成四年度から調査を担当している小笠原雅行・阿部美杉の両氏から多くの教示を得た。また、成田滋彦・三浦圭介・市川金丸の各氏からは縄文文化についての多くの貴重な知見を御教示いただいた。村越潔先生には調査開始以来一貫して御指導・御教授いただいている。記して感謝したい。

〔引用・参考文献〕

青森県教育委員会 「三内丸山（2）遺跡II」

青埋文報第一五七集 一九九四

青森県教育委員会 「三内丸山（2）遺跡発掘調査概報」

青埋文報第一六七集 一九九四

岡田康博 「青森県の縄文集落について―前・中期の場合―」

『よねしろ考古』第七号 一九九一

鈴木保彦 「集落の構成」

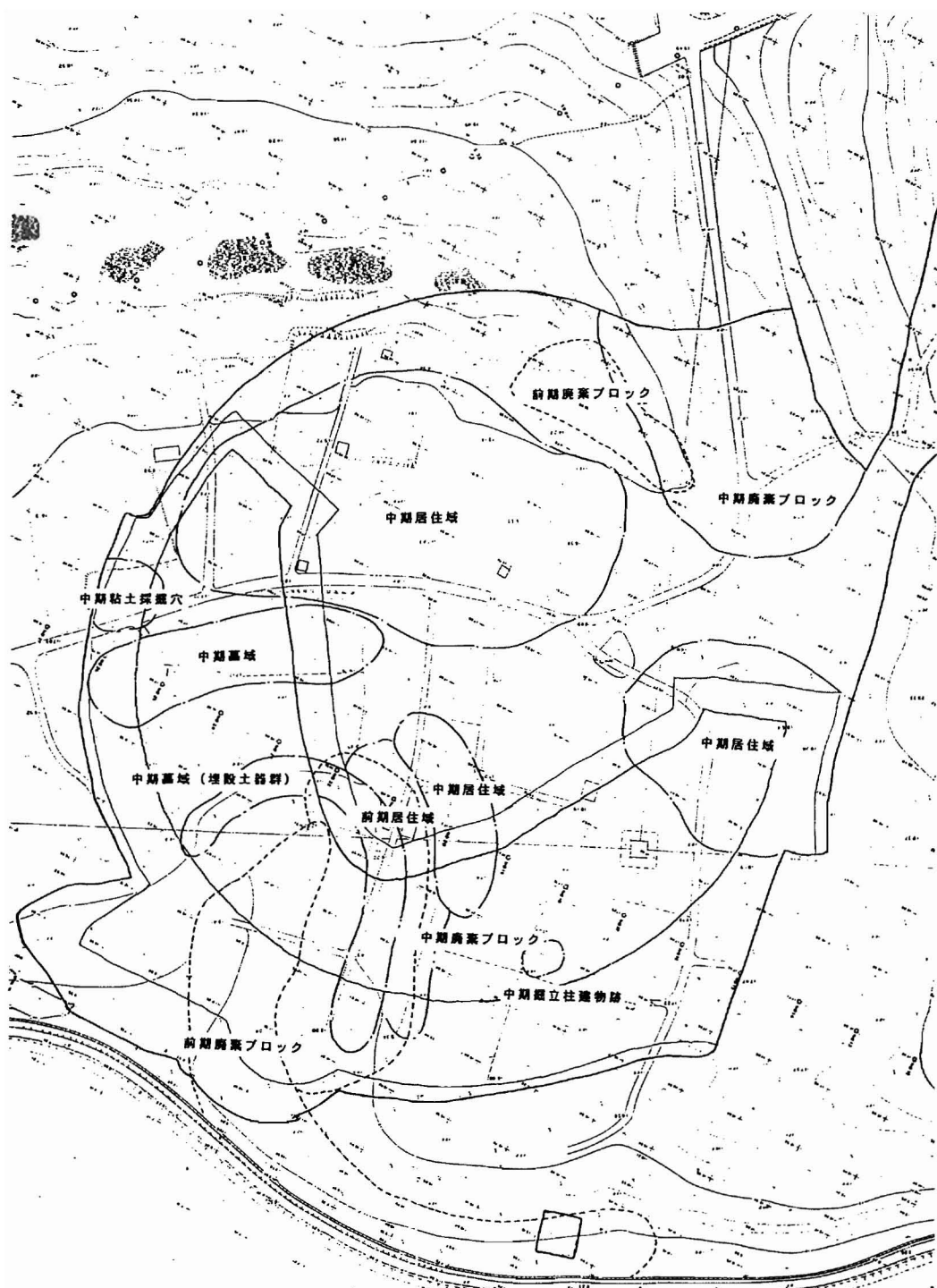
『季刊考古学』第七号 一九八四

『集落・領域論』

『縄文時代』第三号 一九九二

村越 潔 『円筒土器文化』 一九七四

（おかだ・やすひろ 青森県埋蔵文化財調査センター）



三内丸山（2）遺跡集落変遷図